新島八重顕彰会について

同志社女子大学の吉海直人教授は、新島八重研究では同志社で第一人者であることは疑う余地がないことである。先生は平成２５年の大河ドラマ「八重の桜」が放映される前に「新島八重 愛と闘いの生涯」（角川選書）を上梓された。

私は曾祖父が遺した八重の書簡や掛け軸等が我が家にあったので、子供の時から新島八重については身近なものであった。その資料を基に平成２４年４月に「不一・・新島八重の遺したもの」を上梓した。その資料収集の段階で会津図書館に通い、八重が生きた時代の「会津会会誌」「会津会会報」を隈なく読破し、会津会幹事長の了解を得て拙書への会報転載の許可を得て、数多く引用させていただいた。その中に秋山角弥（京都會津会幹事）の「京都通信」があった。なんとそこには京都での晩年の八重の姿が躍動的に描かれていたのである。会津藩特有の「下の句を読み、下の句を取る」板カルタのものなど書かれている。京都帝大総長の新城新蔵にはさすがの八重さんも歯が立たなかったことなども紹介されている。

昭和５年、６年に東京丸の内精養軒で開催された春季会津会総会の模様などもまるで動画を見るように紹介されている。昭和５年の総会には八重と共に私の大叔父（祖父の兄岩澤巌：八重と交流のあった曾祖父岩澤庄伍の長男）も出席していたことが出席者名でわかる。

鶴ヶ城攻防戦で八重がスペンサー銃をもって敵と戦い、無念の落城となったときは２４才であった。それから覚馬を頼り京都に行き新島襄の妻となり死別してから亡くなるまで約４０年。この４０年の間に八重は茶道を通じた女性の地位向上や篤志看護婦・日本赤十字社の活動など「奉仕」の２文字に生涯を費やした。その中で同郷の「京都會津会」「会津会」の会合にはかかさずといってもよいほど積極的に参加している。遺言には所有する容保公の掛け軸は松平家に献上することなどが書かれている。失われた故郷会津藩に対する想いは八重の行動そのものであった。

冒頭の吉海教授に戻るが、先生は本の上梓に当たり、「会津会会報」の存在を知らなかったのである。吉海先生に謹呈頂いた「新島八重 愛と闘いの生涯」のお礼の電話を差し上げたところ「会津会会報の存在は不一を読むまで知らなかった。会津若松市の勉強堂に電話して会津会会報をすべて取り寄せました。」八重顕彰会の HP に「吉海直人の八重講座」があるが、その中に会津会会報で先生がその後勉強された内容がたくさん入っているのでご覧になっていただきたい。

2019 年６月１４日に所用があり大龍寺の住職を訪ねた。朝の８時前だろうか。山本家の墓の方で賑やかに談笑する一団がいた。住職の奥さんである宮子さんに誰かと聞くと室井市長だという。「八重の桜の放送が終わってからずいぶん年数がたつから、今年で墓参りは辞めたらと市長に言うつもりだ」とのことである。私は「顕彰会を作るのは今だ」と思った。不一・・・新島八重の遺したもの」を上梓した時から顕彰会設立を考えていたのである。なぜ今かというと市長選の前でもあり、室井市長の再選はその時点ではわからない。第一もし

市長が変わったら、新市長が新島八重の命日に「山本家の墓」のお参りに来るか保証はない。室井市長は「八重の桜」が放映されたことによる経済効果や、郷土の偉人が東北大震災で失意の中にあった市民や他の東北の人を勇気づけたことを知っているから毎年墓参りに来ているのだ。数年前には山本家の墓の前に宮子さんが新島八重の歌碑を立てた（吉海講座参照)。ちなみに歌碑建立の資金は住職が愛妻の意を汲んで拠出されたとのことである。除幕式の数日前、宮子さんから歌碑の除幕式をやるとの突然の連絡を受け、室井市長と歌碑の除幕を行った。歌碑を建立するにあたり、八重の歌は何がいいと宮子さんに聞かれ、大龍寺にある山本家の墓を連想させる徳富蘇峰記念館所蔵の八重の歌を紹介し、記念館に連絡し、資料を取り寄せその文字を拡大し宮子さんが建立したのである。これは新聞、テレビで報道された。

大龍寺の宮子さんと顕彰会設立の話をした後、当然私の考えを吉海先生に伝えた。「それは良いことです。私も協力しましょう。」ということになった。初めにアドバイスを頂いたことはホームページを開設し広く社会に知ってもらうことが肝要ということで、早速近所に住む詳しい人に格安の値段で HP 作成を依頼した。顕彰活動には資金も必要だから、寄付も幅広く募ったほうが良いのではという示唆も頂き、現在 HP 上で寄付募集を開始した。地元の産品の宣伝にもなればということで商品の参加者を募った。現在１０社程度の参加者がおり、顕彰会の HP 上から参加者の企業の HP まで転移できるようになっている。これは寄付を考慮せずに直接会津特産品を申し込めるスキームである。もちろん顕彰会に寄付していただいた方には、「ふるさと納税」のように返礼品として協力企業の特産品をお届けする。

会津会１００周年式典が上野精養軒で開催されたときは私も参加した。川島廣守会長にご挨拶したのはその時が初めてだった。「不一・・・新島八重の遺したもの」を上梓したと

きに会津会事務局へは献本させていただいた。ところが後日川島会長から直接私のところへ電話があった。「僕のところへ君の本が届いていないよ。」そうか事務局へは献本したが会長個人へは贈ってないことに気づいた。早速お送りしたところ直接御礼の電話があった。残念ながら川島会長はその年にご逝去された。その前に拙書「不一」を読んでいただけたことと私が川島会長の謦咳に接することができたことは今でも望外の喜びである。

その１００周年式典にはもう一つの出会いがあった。山本源八斗南会津会会長との出会いである。その後何かと連絡をさせていただいた。２０１８年戊辰１５０年記念誌「薫猶を選びて」を発行したときには、山本会長に寄稿を依頼したところ、快諾され「先人斗南の心を生き継ぐ」を掲載させていただいた。

延期されたが２０２０年斗南立藩１５０年式典が斗南藩庁のあったむつ市円通寺で開催されることになり、新島八重顕彰会も招待された。この記念すべき式典に我が家にある「白虎隊殉難図」の複製を記念品として贈呈することに決めた。「下北哀史」という歌があるが、その中に白虎隊が出てくるからである。挙藩流刑ともいわれる会津藩下北移住を果たした人々にとって白虎隊の行動は、「会津の義」の発露として極寒の中での戦いの中でよるべき象徴でもあったのだ。次の戊辰２００年まで私たちの自然年齢は持ちそうもない。今しか会津・斗南の絆を形で遺すことはできないと思い決断した。

新型コロナで生活全般「新しい様式」を求められているが、いずれ人類はこの戦いに打ち勝つだろう。その中で遺るのは会津の自然であり、歴史である。先人の遺産が会津会を一つのチャンネルとして未来永劫続く事を祈念したい。

最後に私の経験を披露しておこう。昭和５６．７年私が会社員として宮仕えをしていた時のことである。集団の中に入ると出身地等が話題になる。当時「福島県」と言っても皆が「どこにあるの？」と聞き返す。地図を勉強していない人や特に関西人にはわからない。ところが「会津」と答えると、地図を指し示すことができない人でも皆わかる。「白虎隊」と「会津」は地図の所在が分からなくても日本人であれば頭の中で存在感を持っている。そんなわけで私は出身地はと聞かれると「会津」と答えることにしていた。ある時高知出身の上司が転勤してきた。案の定「お前の出身地は？」と聞かれ、当然「会津」と答えた。反応は「なんだ。賊軍か」であった。まだ昭和の時代にも「賊軍」が残っていた。彼は地方の国立大学出身である。

時は変わり、会津高校同級の京都會津会小西雅彦幹事長が京都会津会１１０年法要の紹介のため会津を訪れ、私も吉海先生と法要に出席した。受付で名前を書くと「岩澤さんですか？」と女性に声をかけられた。話を聞くとなんと「賊軍か」と言い放ったＴ氏の姉だという。Ｔ氏の姉は会津出身者（故人）と結婚して京都會津会法要の受付をしていたのである。Ｔ氏が私に対し「賊軍か」と言い放った時には姉が賊軍と結婚したのは知っていただろう。

戊辰１５０年記念誌「薫猶を選びて」を発行したときにはＴ氏に電話して半強制的に購入していただいたのは言うまでもない。

（文責：岩澤信千代）